
衣装はまだか！？ ～40年目のアンコール～

宇田川城重

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

衣装はまだか！？ ～40年目のアンコール～

【Nコード】

N3006P

【作者名】

宇田川城重

【あらすじ】

『3億円事件』から40年目のちょうどその日、全く同じ手口で765プロの衣装が盗まれた。犯人の狙いは？ 40年目のアンコールが幕を開けた……。

(前書き)

2年前に、某所に投稿したものを修正して再録しました。

2008年12月10日、午前8時。

夜明け前から冷たい雨が降っていた。

宅配便のライトバンが、街道から外れた裏通りを水しぶきを上げて走っていく。

「アイドルも大変だよな。派手な衣装着て歌って、華やかに見えるけど、人気がなくなったらポイだもんな」

運転席の男が、ハンドルを握りながらつぶやいた。

「芸能界はそんなもんだよ。……ところで、これ着るアイドル、確か三浦なんとかと、菊池なんとかと、後一人………忘れた。知ってるか？」

同乗している助手席の男が聞く。

「知らねーよ。俺芸能界詳しくねーもん」

「俺もアイドルのことはわかんないけど、よっぽど売れっ子なのか？ 高そうな衣装だよな」

ライトバンのトラックには、アイドルがイベントで着る衣装が、スーツケース入りで積まれている。

衣装の製作会社から預かった、できたての新品だ。

「ん、なんだ？」

運転手は、車の横を走っているバイクに気がついた。

白バイだ。

手で何か合図をしている。

「………停まれって？ 何だろう」

車が停車すると、白バイに乗った警官が窓をノックしてきた。

「どつしたんですか？」

運転手は窓を開けて、警官に聞いた。

「警察です。実は、先程お宅の会社の社長宅が爆破されたという知らせが入ったんです。この車にも爆弾が仕掛けられていると、犯人

から脅迫電話がありました」

「な、何ですって!？」

「調べますので、降りて下さい」

車の二人はあわてて車外に出た。

それを見計らった後、しばらく警官は車のトランクをガサゴソとやってはいたが、不意に声を上げた。

「あつたぞ! ダイナマイトだ!」

トランクから白い煙が上がっている。

「危ない、爆発する! 離れて下さい!! 急いで!!」

警官が叫んだ。二人は弾かれるように逃げ出した。

「逃げろ!!」

「爆発するぞ!!」

道路脇の電柱の陰に二人は隠れた。

車の方向に向き直ると、車が二人を尻目に走り去っていく。

白バイは停まったまま、雨に打たれていた。

「あれ? 車を安全な所に移すのか?」

運転手がつぶやく。

「でも、どこまで行くんだ。爆発しちまうぞ……………!？」

二人は何気なく道路に目線をやって、あつと息をのんだ。

銀色の発煙筒が雨の中、白い煙を吐き出し続けている。

……………これは、もしかして……………!？」

「あーっ! やられた!!」

「昔の3億円事件の手口だ!!」

衣装はまだか!? 〈40年目のアンコール〉

午前9時。

765プロ事務室の電話が鳴った。

「はいはい、今出ますよ。小鳥さんがいないと、こういうことが大変ね」

別の部屋にいた律子が、小走り電話に向かう。今、小鳥は買い物に出かけていていない。

事務室に入ると、美希が鏡を見ながら髪型をセットしていた。

「ちょっと、いるんなら出なさいよ！ まったく尻が重いんだから叱り飛ばして、すかさず受話器を取る。」

「はい、こちら765プロでございます」

打って変わって、今度は営業スマイルと営業用の声で電話に出た。

「矢口警察署です。実は、おたくのタレントさんが着る衣装を乗せた車が、何者かに奪われたという通報があつたんです」

「な、なんですって!？」

「現在、緊急配備を敷いて、犯人を追っています」

警察からの電話に、律子の表情から笑顔は消え、どんどん険しくなる。

「……はい。……はい、わかりました！ 社長の高木に代わりますので、少々お待ち下さい」

律子は電話を保留にした。

「美希、社長呼んで！ 早く!」

「はあ〜い」

のろのろと立ち上がる美希に、受話器を握った律子の怒鳴り声が飛んだ。

「急ぎなさいよ、緊急事態なんだから!」

美希はあわてて社長室に向かった。

ステージ衣装がニセ白バイの男に盗まれたとの知らせを警察から受

けて、765プロは高木社長と戻ってきた小鳥以下、スケジュールの空いているメンバーは、情報収集と対応に追われていた。

「警察から、新しい連絡はあったかね？」

「いいえ、まだです」

社長の問いかけに、小鳥が答える。

「それと今日のイベント、あの3人はもう現場に到着してるんだろ
う？」

「はい、プロデューサーさんも同行しています」

あの3人とは、伊織、あずさ、真のことだ。

「衣装がないからといって、仕事はキャンセルできんからな。しかし、私服でイベントをするのは、インパクトに欠けるな……売り上げに影響しなければいいんだが」

都内の大規模レコード店の店頭で、3人は新曲発表のイベントをする
ことになっていた。

ちょうどその頃、イベント会場となるレコード店の控室。

控室備え付けのテレビには、衣装盗難のニュースが映っている。

「……芸能プロダクション、765プロのステージ用衣装が、ニセ
白バイに奪われ……」

「わかつてるわよ、もう……！」

伊織は吐き捨てるように、テレビのスイッチを切った。

衣装が盗まれたことは、すでに三人に知らされている。

「衣装がなかったら、イベントができないじゃない！ あーもう、

新しい衣装だっていうから楽しみにしてたのに！」

伊織がわめき散らす一方で、

「伊織、落ちついて、落ち着いて！」

真はなだめるが、内心は焦っているのを隠し切れない。もう開演時
間はとつくに過ぎているのだ。

「困ったわ、まさかこんなことになるなんて」

あずさは首を傾げて、あからさまに困った表情を見せる。

「それに、プロデューサー、どこ行ったのよ!? まさか、私服で

イベントしろってわけ？ シラけちゃうじゃないのよ！」

「ああ、そうならないように、代わりの衣装借りに行ったよ。どんな衣装なんたる……ボク、ちよっと楽しみ」

「私も」

「二人とも、のんきにしてる場合じゃないでしょ！ ああもう、衣装まだ!？」

伊織がいら立っているその時、ノックの音がした。

返事を待たず、プロデューサーが紙袋を抱えて飛び込んできた。

「衣装、借りられたよ。ほら、着替える」

言うが早い、持って来た紙袋に入った衣装を三人に手渡した。

「ちよっと、この服なんか変じゃないの？」

「贅沢言うな伊織！ 時間がないぞ、早く着替える」

そして約5分後、着替え終わって……。

「ちよっと、何よっ!! この服!!」

網タイツ、ハイレグの、胸を強調したスーツ、兎の耳。

「こ、これって、その……バニーガール、ですか……？ ボクにこれを着ると……？」

「あ、あの、私、その……恥ずかしいです。あ、あのプロデューサーさん、どこからこれを？」

「ああ、実は近くにキャバクラがあって、事情を話したら貸してくれたんですよ。運良くサイズが合う奴があって……おっと、しゃべってる場合じゃない、お客さん待たせてるんだった！ ほら、急いで急いで！」

三人はプロデューサーに押し出されるように、ステージに向かった。

結局、時間は遅れたが、イベントはなんとか終了した。

ファンや野次馬の卑猥な視線に耐えて、三人は新曲を歌い切った。

「あー、恥ずかしかった！ もう嫌よっ!!」

「ボクも……ちょっと……」

「私も……」

帰りの車の中で、3人は口々に言った。

……伊織は別としても、あずささんのバニー姿、ちょっといいかも……災い転じて福となすつてこともあるんだな……今度社長にかけあってみるかな……新しい衣装にこんなのはどうでしょうって……運転しながらプロデューサーは、三人に聞かれたら袋叩きにされそうなことをこっそり考えていた。

事務所に戻った一行は、小鳥に新しい情報が入ってないかを聞いた。「だめです、まだ犯人の足取りも掴めていないそうです……」

「そうですか……あの衣装、特注ですからね。何とか返ってこないと困るんですよ」

「でも、プロデューサーさんの機転で何とかイベントができたから、それだけでも良かったじゃないですか」

「いやー、たまたまラッキーだっただけですよ。近くに衣装を貸してくれるところがあったから良かったものの、それがなかったらどうなってたか……」

「うー、ボクはもう勘弁ですよー」

「私も。もう恥ずかしくて嫌ですよ」

……うーん、あずささん、バニーガールは嫌か……残念だ……
またもや、プロデューサーがみんなから袋叩きにされそうなことを考えている時、

「ふっふっふ……ふっふっふっふっ」

それまで黙っていた伊織が不敵な笑い声を上げる。

「どうした、伊織？」

プロデューサーがいぶかしげに尋ねた。

「ここは私に任せなさい。この水瀬伊織の名推理、とくと聞きなさい」

いよ。こんな事件軽く解決よ」

「わかるの!? 伊織ちゃん」

あずさが驚いたように聞く。

「わかるわよ。犯人は頭が切れるわ。だから奪った車では逃げない。きつと別の所に車を隠しておくのよ」

みんな伊織の話に聞き入る。

「そして素早く盗んだ衣装を移し替え、用意していた服に着替えて、白バイの制服を隠す。そして、現場を離れて、近くの駐車場かどこかに車を停めて、衣装だけ抜き取り、車を乗り捨てて立ち去る……こういう手口よ」

伊織の推理が終わった後、あずさがふと口を開いた。

「どうしてそんなことがわかるの?」

「昔そういう事件があったから」

一同ズツコケた。

「何だよ、昔の3億円事件の手口そのままじゃないか!」
プロデューサーが突っ込みを入れる。

「しかし、何でそんな古い事件知ってるんだ? まだ生まれてない頃の事件じゃないか。俺も生まれてないけど」

「本で読んだのよ。どう? 名推理でしょ」

「そんな推理があるか! ……ん? 待てよ。今日は、ちょうどあの3億円事件のあった日だよな。車を奪う手口が、全く同じだった……」

「きつと、模倣犯ってやつじゃないですか?」

真が言った。

「まあ、そういう可能性はあるな。そうだ、テレビつけてみるか。何か新しい情報が入っているかも知れないし」

プロデューサーはテレビをつけた。

「お、やってるやってる」

ワイドショーで、事件の速報をやっていた。

レポーターが中継をしているところだ。

しかし、奪われた現場ではなく、どこかの駐車場のようだ。警察が捜査をしているのがわかる。

「……ここから300メートルほど離れた空き地に、奪われた車が乗り捨ててありました。盗難車の中には、犯人が使用した白バイの制服が残っていました。載せてあったタレントの衣装は持ち去られていました」

レポーターが実況を続ける。

「そしてこれは、犯人が奪った車から乗り換えて使用したものと思われる車です。空き地からのタイヤの跡がこの車のものとはほぼ一致したことで、警察は、犯人が使ったものとはほぼ断定しています」

「おい、伊織の言った通りじゃないか。いや、正確には3億円事件と全く同じ手口だよな」

プロデューサーが言った。

「わ、私……なんだか怖くなってきた……」

「いや、あなたのは根本から推理じゃないし」

青ざめる伊織に、律子が冷静に突っ込みを入れた。

「以上、現場からお伝えしました」

画面はスタジオに切り替わった。

「はい、ありがとうございます。……しかし、驚きましたね。40年前の今日、あの3億円事件が起こって、そして今日、全く同じ手口の事件が起きるとは」

司会者がコメンテーターに話を振る。

「本日に3億円事件と同じ、まるで再現ですね。でも盗まれたのは現金ではなく、タレントさんの衣装だったんですね。大したことはないらなかったようですが……」

「大したことないわよっ！」

テレビに向かって、伊織が突っ込んだ。

「あ、美希。そろそろ時間だ。悪いが今日は一人で行ってくれ」

時計を見たプロデューサーが言う。

「行ってくつて、どこ？」

「レッスンだよ、ボイスレッスン！ 忘れたのか？」

「でも今こういう状況だから……」

「だめよ！」

律子が遮った。

「『ラッキー、レッスン堂々と休める！』とか、内心喜んでたんでしょ」

凶星だった。

「でもだめ、春香も雪歩も千早も、こんな時でもみんなレッスン行ってるんだから！」

亜美と真美、やよいは学校だ。

「気になるのはみんな一緒。でもどうすることもできないでしょ。事件のことはこっちに任せて、早く行きなさい！」

律子に叱られて、美希は渋々レッスンへと向かった。

「あふう、残念……」

美希が出て行って間もなく、電話が鳴った。

「はい、765プロでございます」

小鳥が電話を取る。

「矢口警察署です。あの事件の有力な被疑者がわかったのでお電話しました」

「えっ、なんですって!？」

小鳥はすぐに、電話機の外部スピーカーのスイッチを入れた。これで部屋の中の全員に、電話の音が聞こえるようになった。

「山野雄二、23歳。会社員です」

「犯人、わかりましたか。早いですね」

「ええ、乗り捨ててあった車に、被疑者の免許証が落ちていたので一同、さつき以上にズッコケた。」

「なんなんだよその犯人は！ これだけ完璧にやっというて、最後でそんなポカするなんて！」

プロデューサーを始め、一同は呆れた。

「しばらくは被疑者を泳がせるために、被疑者が判明したとの報道

は控えるとのことですよ」

警察の担当者からの説明は続く。

「どうして泳がせるんですか？」

「何しろ今日は……あの日なので、もしかしたら何かあの事件に係があるのでは、という捜査方針です」

「あの事件……他でもない、3億円事件のことだね」
社長がつぶやいた。

「しかし、古い事件なので、可能性は万に一つもないくらい低いですがね」

「そうですね……あ、でも、報道しないってことは、警察での機密事項のほうですよ。どうしてうちに電話したんですか？」

ふと疑問に思った小鳥が、担当者に尋ねる。

「実は……被疑者の住所が、お宅の近所なんです」

「えっ!？」

「東京都大田区矢口2-1-573、これが被疑者の住所です」

「矢口2-1-573!？ それって、うちのすぐ近所じゃないですか!？」

765プロの番地は2-1-765なので、目と鼻の先だ。

「山野雄二という名前に心当たりはありませんか？ それを確かめたくてお電話したんですが。おたくの従業員がタレントにいませんか？」

「いいえ、うちには……」

「タレントにそんなのいないわよっ! ふざけないでよっ!」

横から伊織が怒鳴った。

「わかりました。では、何かありましたら、こちらまで電話を下さい」

「はい、わかりました。ありがとうございました。失礼します」

小鳥は電話を切った。

「失礼しちゃうわね! うちのタレントにいないか、ですって! これだから警察って嫌なのよ!」

「まあまあ、落ち着いて、伊織ちゃん」

あずさが伊織をなだめる。

と、その時、ドアをノックする音がした。

「……ごめん下さい」

「はい、どうぞ！ お入り下さい」

小鳥が返事をする。

間もなくドアが開いた。そこには、大きなスーツケースを持った青年風の男が立っていた。

スーツケースには、『765プロ特注品』と書いた紙が貼ってある。

「……」

「……」

一同、男と顔を見合わせて、両者の間にしばしの沈黙が流れた。

「山野雄二くん……だね」

全てを察した、社長が問いかける。

「はい。警察に自首する前に、これを返していこうと思ったんです。スーツケースに貼ってあった伝票に書かれていた依頼主の住所、ここでしたから」

衣装が入っているはずのスーツケースを差し出した青年の、人気俳優と見紛うような整った顔立ち。これがあの事件の張本人なのか。にわかには信じられない。

「あ、あれが……どろぼうさん？」

あずさは驚きを隠し切れない。

「……あ、ちよつと……いい男……って、やだ、私ったら！」

伊織はぶんぶん頭を振った。

「あ、あんたねえ！！ 良く図々しく押し掛けて来られたわね！」

どうせ、コレクションにして興奮したりとか、オタクに売って大儲けしようとかで盗んだんでしょ！！」

伊織は堰を切ったようにまくし立てるが、

「伊織。まずは話を聞こう」

プロデューサーが静かに止めた。

「何のつもりで、こんなことをやったのかね？」

社長が聞く。

「……ほんの軽い気持ちでやったのが、こんな大騒ぎになってしまつて……」

雄二は静かに話し始めた。

「僕はただ、叔父の書いた小説の通りにやってみただけなんです。まさか、あんなに完璧にうまくいくなつて……テレビでニュースを見て……それに偶然とはいえ、標的になつたのが、僕の近所の芸能事務所だつたなんて……怖くなって自首しよう……」

「小説の通りに……じゃあ、3億円事件を真似たわけじゃないんだね」

社長が聞くと、雄二は不思議そうな顔をした。

「真似？ 何です、それ？」

「社長、知らないのも無理ないですよ。何しろ昔の事件ですからね」プロデューサーが口を挟む。

「うむ、そうだな。何しろ、40年前の事件だからな」

「40年前……そういえば、叔父がその小説を書いたのも40年前でした」

「ええっ！ 何だつて!？」

雄二の思わぬ言葉に、社長とプロデューサーは驚きの声を上げた。

「父から聞いた話です。父の兄……叔父は作家志望で、学生の頃からよく書いてました。出版社への持ち込みもよくやっていたそうです。没になつた作品の一本を読んだら、ふと、何かこう……自分でもやってみたくなつて……」

「その叔父さんは今いるかね？」

「いいえ、いません……交通事故で死にました。飲めないはずの酒を、外で浴びるように飲んできて……小さな雑誌で念願のデビューが決まつて、浮かれていたのかも知れませんが。明日が40回忌の命日で、法事の準備を手伝っていたら、叔父の家の物置にあった形見からその小説が出てきて……」

「昭和43年の12月11日に亡くなったのか……」

「3億円事件の翌日ですね……」

やがて雄二は、自ら110番通報して、駆けつけた警察に連行されていった。

事件はこれで解決した。

待ちに待った新調の衣装も、これでめでたく納品となった。

日はすでに、とっぷりと暮れている。

そして、一同は今回の事件を語り合った。

その中には学校から直行してきた亜美と真美、やよい、レッスンを終えて戻ってきた春香、雪歩、千早もいる。

「結局あの人、叔父さんの書いた小説のトリックを試すためにやっただけで、衣装が目当てじゃなかったってことなのね」
あずさが言う。

「つまり私たちは、トリックの実験台だったってこと？ あーもう、なおさら悔しい！」

「そう怒らないで。どろぼうさん、目的が終わったら衣装返してくれたんだから、もうそれでいいじゃないの」

「どろぼう『さん』じゃないでしょ！ 本当にあずさはお人好しなんだから！」

怒る伊織を尻目に、プロデューサーは社長と話していた。

「社長。今回の事件、結局なんだったんでしょうね」

「そうだな、彼の叔父か……もしかすると……あの事件の犯人だった……かも知れん」

みんな驚いて社長の方を向いた。

「いや、それは飛躍し過ぎか。たまたま、犯人と同じことを考えていただけ……なのかも知れん」

社長は背を向けた。

「しかし、どちらにしろ、あの事件の犯人が交通事故などで死んでいるはずがない。そうとも思わなけりゃ……この世にはいない犯人に、誰もが振り回されたことになる……」

40年後の今日に至っても未だに謎のままの、昭和を代表するミス
テリーとなったあの事件。

その犯人は今どこでどうしているのだろうか。それとも、もうこの
世にはいないのだろうか。

それは、誰にもわからない。

40年目のアンコールは、結局何も真相を解き明かさなかった。

「それよりもあいつ、私にあんなカッコさせて恥かかせてくれて、
この罪重いわよ！　しばらく刑務所で反省してりゃいいのよ！」

伊織が吐き捨てるように言った。

「いや、自首したんだし、誰にもケガさせてないんだから、執行猶
予はつくんじゃないか」

プロデューサーはケロリと言う。

「執行猶予？　まあ、どっちでもいいわ。出られたらいらっしやい
よ、カバン持ちとか、お茶汲みとか、使い走りとか、たっぷりこき
使ってやるんだから！」

「おっ、伊織、付き人に雇ってやるのか？」

「覚悟しなさいよ、私は厳しいから。たっぷりお返ししてあげるわ
よ」

「とか何とか言って、あいつのこと、まんざら嫌いでもないんだろ
？　さては衣装だけじゃなくて、ハートまで盗まれたな」

「ち、違いわよっ！　誰があんなやつ……」

伊織は頬を染めて否定するが、誰も信じる者はいない。

「偉いじゃない、立ち直らせるチャンスをあげるなんて。私は賛成
ですよ。いいですよね、社長」

小鳥が進言した。

「ああ、もちろんだとも。彼は反省していることだし、伊織くんが
更生に一役買おうというなら大歓迎だ」

「それも違いわよっ！　やられっぱなしじゃ腹の虫がおさまらない
のよ！　この水瀬伊織様をモルモット扱いだなんて！」

「亜美はハムスターの方がいいよー」

「真美はウサギー」

「ほらそこ、話脱線させない！」

みんなの明るい笑い声に戻った、765プロの夕暮れであった。

その頃、レッスン帰りの美希は一人、すっかり暗くなった街を歩いていた。

「くしゅん！！ あふう、寒いっつ……まだ犯人捕まってるのかなあ？」

(後書き)

今回の元ネタは、こちら葛飾区亀有公園前派出所12巻『ボーナスはまだか!?'の巻』です。

冒頭と結末はすぐにできましたが、中盤がうまくまとまらなくて、強引に話を進めて、終わらせてしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3006p/>

衣装はまだか！？ ～40年目のアンコール～

2010年12月5日00時27分発行